



## 「Pervasive Data Integrator」機能評価ガイド

## 「Pervasive Data Integrator」機能評価ガイド

「Pervasive Data Integrator」（以下、PDI）は、企業内のあらゆるデータ連携・アプリケーション連携だけでなく、ERP、CRM、SCM、e-コマースなどさまざまなシステムのデータ統合を実現させるべく、数多くのコネクタ、使い易い開発環境などを備えた製品となっております。

本書は、PDI をご評価されるお客様に対し、その入り口へと案内するために作成いたしました。また、ここでご紹介する手順は、評価（製品）版に含まれているサンプル用のデータを使用しますが、実際のご使用にあたり使用されるデータベース等が異なりましても、この一連の手順を踏まれることで実際の運用のほとんどに対応可能ですので、基本的な流れをご理解いただけるように構成しております。なお、「PDI」は多彩な機能を持ち合わせておりますので、本書におきましても全ての機能を網羅しておりませんこと、あらかじめご承知おきください。

\*最新のコネクタにつきましては、ホームページでご確認ください。

<http://www.dataondemand.co.jp>

### 【エディション】

PDI には、その用途に応じ下記のエディションが用意されております。

◆ ***Pervasive Data Integrator Standard***

全製品共通のツールとして Map Designer、Process Designer、Repository Explorer、Structured Schema Designer、Data Browser とプログラムからの呼び出しをサポートする SDK を含みます。またコネクタは標準的なコネクタ一類が含まれます

◆ ***Pervasive Data Integrator Pro***

Standard 版に高速版、高機能版のコネクタを追加

◆ ***Pervasive Business Integrator Standard***

Pervasive Data Integrator Standardに標準的なメッセージ連携コネクタを装備し、EAIの構築に対応します。

◆ ***Pervasive Business Integrator Pro***

Pervasive Business Integrator StandardにSalesforce、SAPなどのアプリケーションアダプターとMQコネクタが追加されます。大規模なEAIの構築が可能です。

◆ ***Pervasive Data Integrator Salesforce.com Edition***

Standard 版をベースに、データ変換の少なくとも片方が Salesforce.com である場合にご利用いただける製品

## 【動作 OS 環境】

PDI は、以下の環境で動作いたします。

- Windows 2000 / XP / Server 2003

## 【統合パッケージ】

PDI は、その基本アーキテクチャによって設計、管理、運用・配布することが可能です。

### □ 設計

使い勝手の良い、柔軟な開発環境は時間を節約し、コストを削減します。トランスペアレントで再利用可能な設計は他のプロジェクトで再利用することができます。

#### ■ *Map Designer*

抽出ルールの変換をマッピングするツール

#### ■ *Process Designer*

ドラッグアンドドロップによるグラフィカルなプロセスフロー設計ツール

#### ■ *Schema Designer*

*Structured Schema Designer*、*Document Schema Designer* の 2 つがあります。多岐にわたるソースからスキーマを取り込んで定義する機能を持つツール

### □ 管理

集中型の XML ベースのメタデータリポジトリによって、分散型統合管理が可能になります。業務をリアルタイムで監視することにより、ダウンタイムを削減し、性能を最大限に発揮させることができます。再利用可能な設計は他のプロジェクトで再利用することができます。

#### ■ *Repository Explorer*

全ての設計ツールで設定された情報およびメタデータ、変換プロセスや変換ロジックなどは、XML 形式のファイルに保存されており、そのファイルを管理するツール

### □ 運用・配布

広範囲にわたる運用エンジン製品によって、開発者はパフォーマンスを調整し、あらゆる規模のプロジェクトおよび統合シナリオにも適応させることができます。

#### ■ *Integration Engine*

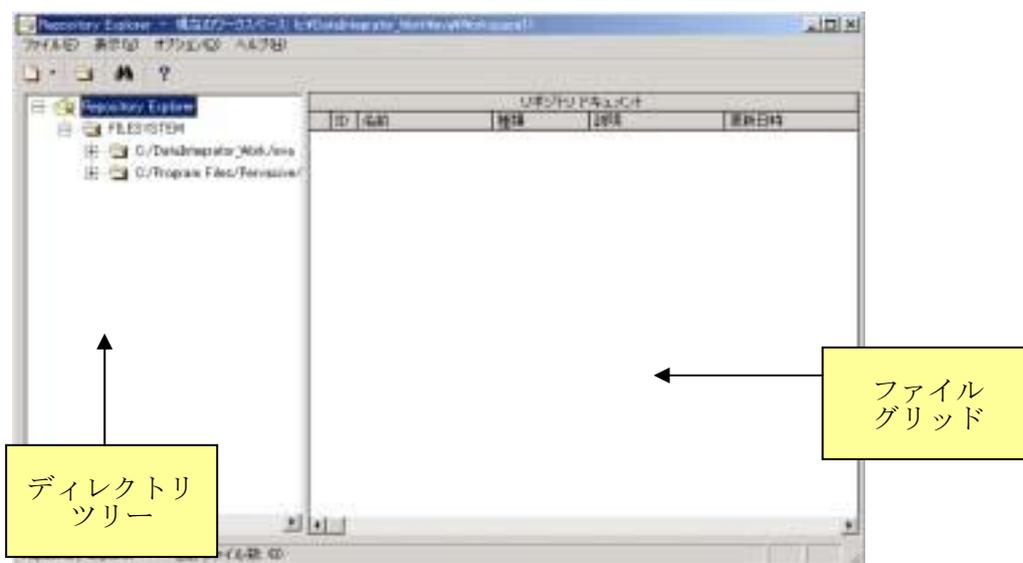
コマンドライン インターフェイスまたは *Java*、*COM* および *C* などのアプリケーションインターフェイスから起動可能を管理するツール

## ◆ 【Map Designer】

1. PDI の基本である” Map Designer” を使って、簡単な変換プロセスを作成します。

- ・ 「スタート」メニューの「プログラム」から、「Pervasive Data Integrator」 「Repository Explorer」を選択。「Repository Explorer」の画面が立ち上がります。

下図は、「Repository Explorer」の画面および名称です。



2. ” Map Designer” を起動します。

- ・ 「ファイル」 - [新規作成] - 「マップ」を選択。「Map Designer」の画面が立ち上がります。下図は、「Map Designer」の画面です。



■ [ソース接続]タブ

変換元データに関する設定を行います。

- ・コネクタ、ソースファイル、スキーマ作成、選択、ソース データの表示など

■ [ターゲット接続]タブ

変換先データに関する設定を行います。

- ・コネクタ、ターゲット ファイル、スキーマ作成、選択、ターゲット データの表示など

■ [マップ]タブ

ソースデータからターゲット データへの変換の定義を行います。

- ・変換、変換フィルタ、データ操作など

3. [ソース接続]を設定します。

- ・ ソース接続：下矢印をクリックして、「出荷時設定の接続」タブの一覧から” **ASCII(Delimited)** ” を選択し、[OK]をクリックします。
- ・ ソースファイル/URI：下矢印をクリックして” **TUTOR1.ASC** ” を選択し、[開く] をクリックします。

\*” TUTOR1.ASC” は、デフォルトのインストールディレクトリ¥common800 内にあります。

- ・ メッセージが表示された場合、[OK]をクリックし、そのまま続けます。
- ・ [ソース Data Browser]アイコン をクリックして、ソースファイルの内容を表示します。先頭行にフィールド名が表示されているので、正しく認識されるようプロパティを変更する必要があります。閉じるボタンをクリックして、[ソース Data Browser]を閉じます。
- ・ 右側の一覧にあるHeader プロパティ横の” **False** ” をクリックして、さらに下矢印をクリックし、” **True** ” に変更して、[適用]ボタンをクリックします。
- ・ 再度、[ソース Data Browser]アイコン をクリックして、ソースファイルの内容を確認します。

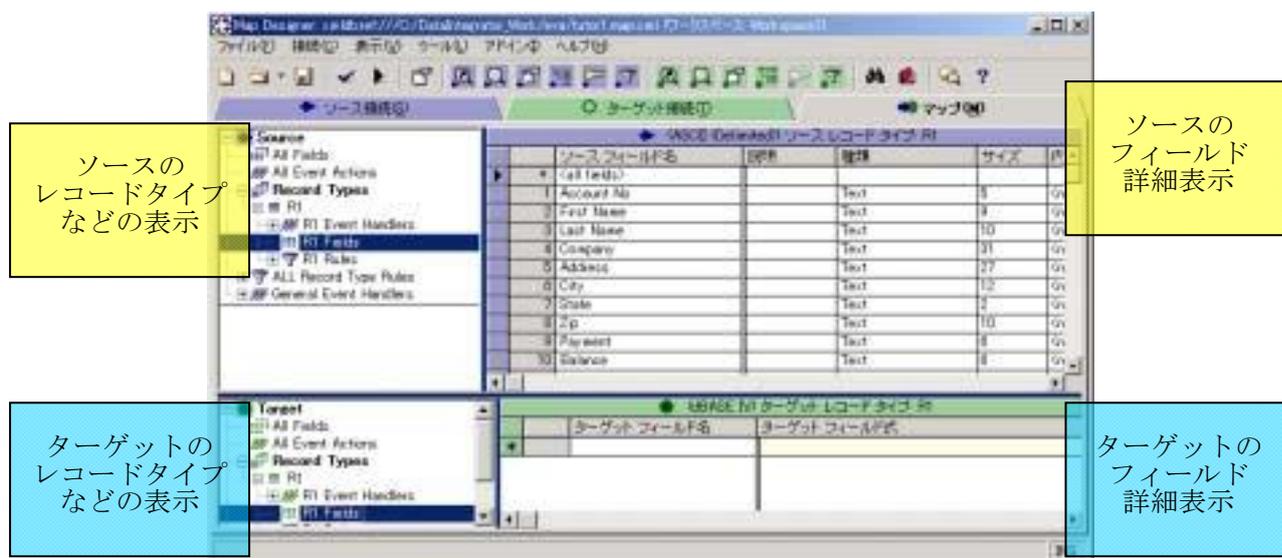
4. [ターゲット接続]タブでターゲットを設定します。

- ・ ターゲット接続：下矢印をクリックして、「出荷時設定の接続」タブの一覧から” **dBASE IV** ” を選択し、[OK]をクリックします。
- ・ ターゲット ファイル/URI：下矢印をクリックして ファイル名 ボックスに” **TUTOR1.dbf** ” と入力し、[開く]をクリックします。
- ・ [ターゲット接続]タブの下部にある[接続]ボタンが無効になっていない場合は、クリックします。

- ・ 出力モード：“ファイルテーブルを置換”とします。新規にターゲットファイルを作成する場合には、このモードを使用します。このモードでは、新規にファイルが作成されるか、同名ファイルがある場合には置き換えられます。

5. [マップ]タブで変換の定義をします。

下図は、[マップ]タブの画面です。



- ・ 右上の領域で、<all Fields>と表示されたセルの左にある[\*]をクリックし、マウスボタンを押したまま、右下にある領域のセルまで移動し、カーソルが黒い四角  に変わったら、マウスボタンを離します。
- ・ dBASE ではフィールド名に小文字やスペースを表示できないため、[不正なフィールド名]ダイアログボックスが表示されます。Map Designer は、デフォルトでは、全ての不正なフィールド名に対して有効なフィールド名を自動生成します。
- ・ [不正なフィールド名]ダイアログボックスで[OK]をクリックすると、[ターゲットフィールド名]の文字は大文字となり、スペースはアンダースコア(\_)に置き換えられ、[ターゲットフィールド式]には、ソースフィールド名が適当なマッピング式として挿入されます。
- ・ 左上の領域で、“Record Type” – “R1” – “R1 Event Handlers” と展開し、“AfterEveryRecord” を選択します。
- ・ [アクションパラメータ]グリッドでアクション列をクリックすると  が表示され、これをクリックすると[イベントアクション定義]ダイアログボックスが表示されます。

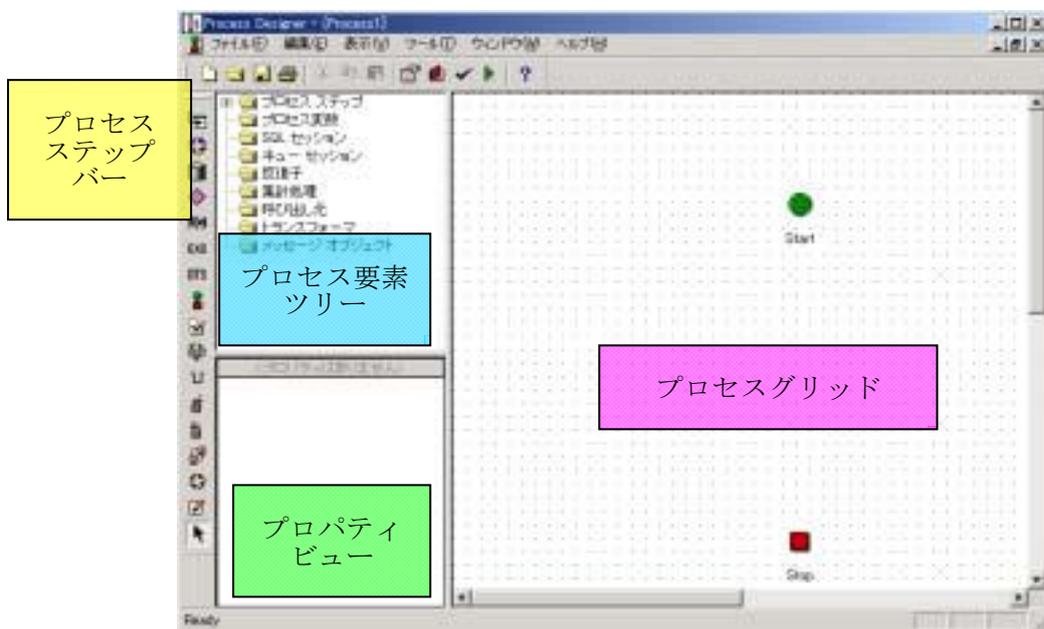
- アクション名の下矢印をクリックして、一覧から” **ClearMapPut Record** ” を選択します。” **ClearMapPut Record**” は、変換で最も使用されるアクションです。単一レコードから単一レコードへの変換でこのアクションの追加を忘れても、自動的に追加されます。
  - [OK]をクリックします。
6. これで変換の 3 つの手順（ソース、ターゲット、マップ）の設定が完了しました。  
このファイルを保存します。
- ツールバーにある[Map の上書き]アイコンをクリックして、ファイル名（例：Tutor1）を入力し、[保存]をクリックします。マップのデフォルトのドキュメントタイプは” .map.xml” です。
7. 保存した Map ファイル（変換プロセス）を実行します。
- ツールバーにある[Map の実行]アイコンをクリックします。  
変換処理の実行状況を示すゲージや、変換済みレコード数が表示され、変換処理終了後、読み取られたレコード数と変換されたレコード数がステータスバーに表示されます。
8. 変換先の内容を確認します。
- ツールバーにある[ターゲット Data Browser]アイコンをクリックします。
  - 内容を確認したら[閉じる]ボタンをクリックします。
9. “Map Designer” を終了します。
- [閉じる]ボタンをクリックします。

## ◆ 【Process Designer】

Process Designer は、Map Designer で作成した変換プロセスなどを使用して、プロセスフローを設計するツールです。ここでは、先ほど作成した変換プロセスを日曜日以外実行する簡単なフローを作成します。

### 1. “Process Designer” を起動します。

- ・ スタート」メニューの「プログラム」から、「Pervasive Data Integrator」 「Repository Explorer」を選択。「Repository Explorer」の画面が立ち上げます。
- ・ 「ファイル」 - [新規作成]- 「プロセス」を選択。「Process Designer」の画面が立ち上がります。下図は、「Process Designer」の画面（プロセスキャンバス）です。



- [プロセスグリッド]には、予め” Start” と” Stop” が配置されています。この間に[プロセスステップバー]にある各ステップを適切な位置に配置し、それぞれを定義。それらをリンクさせることによって、プロセスフローが完成します。
- [プロセスステップバー]の代表的なもの

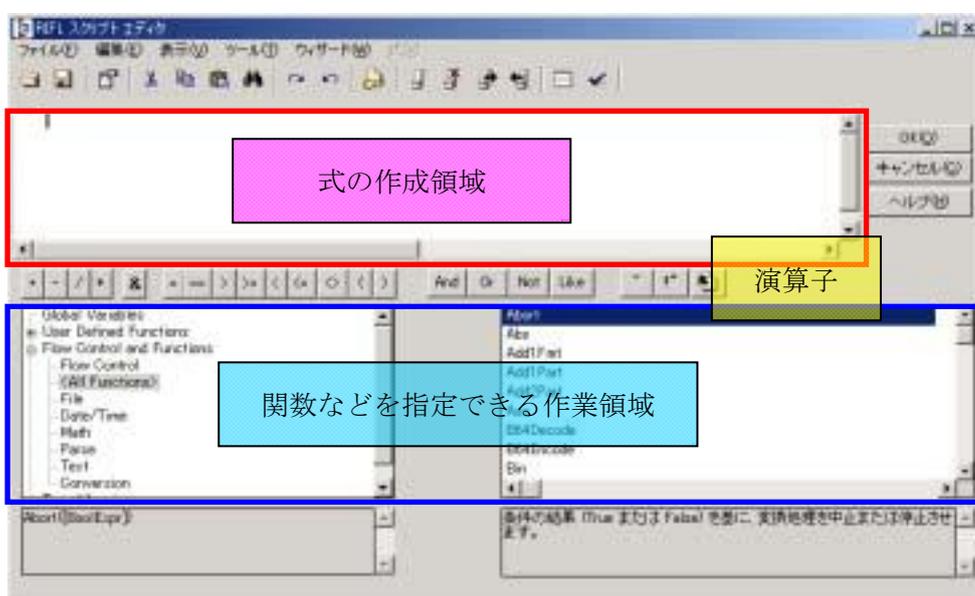
- 📄 プロセス間のリンクや、右クリックでショートカットメニュー
- 📄 マップの実行
- 📄 SQL クエリを実行するプロセスのステップを指定
- 📄 次に実行するプロセスのステップを指定する条件式を作成
- 📄 標準カーソル

2. 曜日の判定をするステップを作ります。

- ・ [プロセスステップ バー] にある[判断]アイコン  をクリックし、カーソルをプロセスグリッドの” Start” と” Stop” の間でクリック。判断ステップが配置されます。
- ・ [プロパティビュー]のプロパティ<Name>を” 日曜か、判断” というようなわかりやすい名前に変更します。

3. 日曜なら” True”、それ以外なら” False” になるような式を作成します。

- ・ プロセスグリッドの[判断]アイコン  をダブルクリック。[判断]ウィンドウの[ビルド]ボタンをクリック。「RIFL スクリプトエディタ」が起動します。



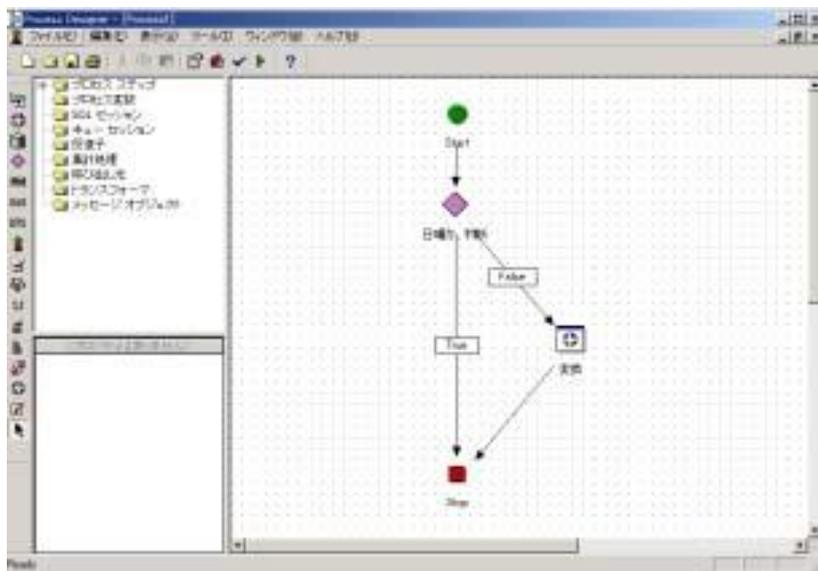
- ・ 左下のペインで” Date/Time” をクリックし、右下のペインで” DataPart” をダブルクリック。\*DataPart 関数：日付文字列から指定した一部を取り出します。関数に関する詳細は、ヘルプをご参照下さい。
- ・ 上部のペインにあるDataPart 関数の Interval 部分を ” w” に、Date 部分を NOW() に変更して、最終的な式を下記のようにして、[OK]をクリック。  
 $\text{DatePart}(\text{“w”}, \text{NOW})=1$
- ・ [判断]ウィンドウで、[OK]をクリックして閉じます。

4. 変換のステップを作ります。

- ・ [プロセスステップ バー] にある[変換]アイコン  をクリックし、カーソルをプロセスグリッド上でクリック。変換ステップが配置されます。[プロパティビュー]のプロパティ<Name>を” 変換” というようなわかりやすい名前に変更します。それ

それぞれのステップは、[プロセスグリッド]上でドラッグすることで適当な位置に配置可能ですので、後でリンクしやすいように配置して下さい。

5. 使用するマップファイルを指定します。
  - ・ 変換のプロセスグリッドの[変換]アイコン  をダブルクリック。
  - ・ [変換]ウィンドウの[参照]ボタンをクリックし、先ほど作成した” Tutor1.map.xml” を選択。[開く]ボタンをクリック。[変換]ウィンドウのマップフィールドに入力されます。
  - ・ [変換]ウィンドウで、[OK]をクリックして閉じます。
  
6. 各ステップのリンクを作成します。
  - ・ [プロセス ステップ バー] にある[リンク]アイコン  をクリック。カーソルを Start ステップ上へ移動します。カーソルは、キャンバス上では  で、ステップ上では  となります。
  - ・ Start ステップでクリックし、判断ステップまでカーソルを移動してクリックします。
  - ・ 次に判断ステップでクリックし、Stop ステップでクリックします。[判断の結果] ダイアログが表示されるので、[True]を選択します。これにより、判断ステップでの条件が True と評価されたときの、経路が示されます。
  - ・ 再度、次に判断ステップでクリックし、変換ステップでクリックします。[判断の結果]ダイアログが表示されるので、[False]を選択します。
  - ・ 最後に変換ステップでクリックし、Stop ステップでクリックします。これで、プロセスフローが完成しました。

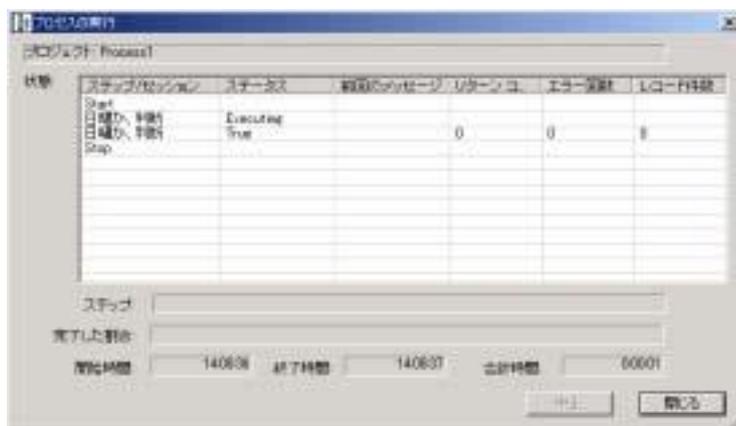


7. 作成したプロセスフローの動作を確認します。
  - ・ ツールバーにある[プロセスの実行]アイコンをクリック。[プロセスの実行]ダイアログが表示され、プロセスフローの動作状況が確認できます。

次の図は、平日にプロセスが実行されたときのものです。



同じプロセスを日曜日に行った場合は、次のようになります。



8. プロセスフローを保存します。
  - ・ [プロセスの実行]ダイアログの[閉じる]をクリックし、ツールバーにある[プロセスの上書き]アイコンをクリックして、ファイル名 (例: Daily) を入力し、[保存] をクリックします。プロセスのデフォルトのドキュメント タイプは ".ip.xml" です。
10. "Process Designer" を終了します。
  - ・ [閉じる]ボタンをクリックします。

#### ◆ 【チュートリアル】

PDI には、製品をご理解頂くためにオンラインマニュアルにチュートリアルがございます。本ガイドでも行いました「変換プロセスの作成」を含め、「Map Designer」、「Process Designer」などを使用する方法について書かれております。是非一度、チュートリアルをお読みいただき、PDI についてご理解いただければと思います。チュートリアルは、オンラインマニュアルの「Tutorials」になっております。

#### ◆ 【セミナー情報】

現在、Pervasive Data Integrator に関します無料セミナーを下記の通り実施いたしております。是非、ご参加ください。

➤ 製品紹介セミナー

製品概要、製品デモを中心に解かりやすく丁寧にご説明させていただきます。また、資料の送付もお受けいたしております。

開催日程など詳細およびお申し込みは、下記ホームページをご参照ください。

<http://www.dataondemand.co.jp>

#### ◆ 【お問い合わせ】

製品ご購入前の質問や、購入に関するご質問などは、下記窓口までお願いします。

➤ データ・オンデマンド ソフトウェア株式会社 営業部

電話：03-3293-5151

E-mail：[salesinfo@dataondemand.co.jp](mailto:salesinfo@dataondemand.co.jp)

\*E-mail には、御社名、御部署、お名前、電話番号、ご質問の記載をお願いいたします。